〔研究ノート〕

ハプスブルク家の聖人たち
—16世紀初頭の系譜学者ヤーコプ・メンネルの仕事より—

Die Heiligen des Hauses Habsburg
in den Werken des Genealogen Jakob Mennel

田　中　圭　子
Keiko Tanaka

はじめに

1508年より神聖ローマ皇帝号を称したマクシミリアン一世は、帝国首長の地位にふさわしい家系として、自らの家門ハプスブルク家のイメージを高めるため、さまざまな試みを行った君主である。例えば、この試みはハプスブルク家の起源説に結晶し、その血統は、他のいかなる家門をも凌駕するほど古く高貴な祖先、トロイアのヘクトールや旧約聖書に登場するノアに発するとされた[1)]。また、血縁や婚姻により多数の有力な家系と結びつくことも誇示され、そのうえ、時代的・地域的に大きく拡大してとらえられたハプスブルク家の親族ネットワークの中には、多数の聖人、また未だ列聖されずとも聖なる存在とみなされている人々が含まれることも、宮廷の学者たちによって主張された。これらは、血統の神聖化と家門の卓越性への意識を高めることに、おおいに貢献したといえる。

ハプスブルク家の系譜に連なるとされた聖人たちは、木版画などによって図像化され、さらに、教会の典礼暦の中にハプスブルク家の聖人たちの記念日を数多く取り入れた、家門独自の聖人暦の編纂さえ試みられた。

本稿では、このようなハプスブルク家の聖人暦についての草稿、及びこれら聖人を描いた木版画連作に付された解説文を主な史料として、この王朝と結びつくと考えられた聖人たちの特徴を、主としてその出自という側面から指摘したい。まず第１節において、上記史料の著者であり、マクシミリアン周辺における系譜研究を主導した学者ヤーコプ・メンネルについて、第２節において本稿で取り上げる史料について概観する。第３節では、高貴な家門の聖人たちが、いかにしてハプスブルク家の系譜の中に取り入れられたか、その根拠と目的についての検討を試み、最後に、ハプスブルク史における、また君主による自己表現の歴史における位置付けについて、今後の研究の課題をも含めて概括したい。

1

ヤーコプ・メンネル[2)]はブレゲンツ出身であり、1460年頃に生まれたと考えられている。テュービンゲン大学に学んだのち、ラテン語教師、そしておそらくは公証人としても働き、1496年から1500年まではフライブルク市書記官の職を務めた。フライブルクでは1497年から98

年にかけて帝国議会が開催され、その機会にメンネルはローマ王マクシミリアン一世の知遇を得たと考えられる。

1505年に国王顧問官に任命されたメンネルは、主としてハプスブルク家の歴史と系譜に関わる研究活動に携わることとなり、1507年には『ハプスブルク年代記』[3)]のような著作を刊行した。メンネルは、その後数年間にわたってオーストリア・ネーデルラント・イタリア等において、広汎な史料収集活動を行い、大冊『君主の年代記』はその成果を取り入れて執筆された。この著作は1512年から1517／1518年の間に手がけられたと考えられており、6巻からなる細密画入りの手稿本が残されている[4)]。

1519年にマクシミリアンが没した後も、メンネルはなお数冊の書物を著しているが、ハプスブルク家のための仕事からは遠ざかったとみられている。彼は1507年よりフライブルク大学の教授職を得ており、長く住まったこの町で1526年にその生涯を終えた。

ヤーコプ・メンネルの仕事は、19世紀から20世紀初頭にかけては、学問・文芸の歴史において豊かな貢献をなしたものとは、決して考えられていなかった[5)]。ハプスブルク家の王朝意識の形成という側面において、メンネルが果たした役割を評価しようとする研究方向は、主としてアルフォンス・ロツキーによって切り拓かれたといえる。彼は、メンネルの業績はマクシミリアンの政治との関連において把握されねばならないと評し、またその一方で、文書のみならず碑文や図像などをも含めた幅広い史料を用いたその方法を、歴史学における補助学の利用の先駆ともみなしたのである[6)]。このような視角を受け継ぎ、メンネルが依拠した史料や起源説形成において用いられた方法を、より具体的に解明する試みを行ったのは、ゲルト・アルトホフとディーター・メルテンスであった[7)]。本稿も、上述の諸研究を通じて提示された視点より、メンネルによって創出されたハプスブルク家の家門イメージの一側面について、検討を加えようとするものである。

2

ハプスブルク家の聖人暦についての草稿[8)]は、1513／1514年にメンネル自身によって書かれたと考えられている。草稿の前半は、教会の祭日・祝日・聖人等の記念日が1月から12月までの日付順に書かれた暦であり[9)]、後半には、メンネルが知りえた限りにおいて、ハプスブルク家の祖先たちの埋葬地が記されている[10)]。草稿前半に記された暦に登場する聖人のうち、100名以上はメンネルの他の系譜学的著作に現れる、ハプスブルク家と何らかのつながりをもつとされた聖人たちであり、彼らについては簡略ながら出自や関係の深い土地を示す解説文が添えられている。暦の作成に際しては、1512／1513年に書かれた『君主の年代記』初稿が参照されたと考えられている[11)]。

また、『君主の年代記』に登場する諸聖人は、素描・細密画・木版画による連作図としても描かれ、それらはいずれも『皇帝マクシミリアン一世の親族・姻族における諸聖人』と称されている[12)]。現存する5種類の連作のうちの1つは、アウクスブルクの画家レオンハルト・ベックにより制作された木版画[13)]であり、マクシミリアン没後に刷られた版の中には、各聖人についての解説文が付されたものもある[14)]。この文章は、聖人暦草稿よりやや詳細な情報を含んでおり、各聖人の出身家系・出身地・事績・生没年・埋葬地などに関して、必ずしもそれら全てについて言及されているわけではないにせよ、ある程度の説明がなされている。この解説文の

大部分は、1522年に出版されたメンネルの著作[14a)]にみられるテキストと同一であり、また、この書自体も『君主の年代記』の記述に基づくとみなされている[15)]。

よって、ハプスブルク家の聖人暦の草稿と、『皇帝マクシミリアン一世の親族・姻族における諸聖人』解説文は、ともに『君主の年代記』に直接的または間接的に依拠するといいうるのであり、それゆえに、聖人たちの配列上の相違（前者が暦の順であるのに対し、後者はほぼ家系別）と、取り上げられた聖人のわずかな異同を除けば、ほぼ共通する内容をもつのである。

3

メンネルが構想したハプスブルク家の聖人たちについて、ここではさしあたり最も顕著な特徴、すなわちメロヴィング家、カロリング家、そしてイングランド王家に関係するとされる聖人がきわめて多数にのぼり、全体のほぼ半分を占めていることに限って取り上げ、なぜそのような結果が引き出されたかを指摘することとしたい。

まず、メロヴィング家とハプスブルク家の系譜上のつながりは、メンネルらによって提唱された起源説の根幹として、重要な意味をもっていた。中世を通じて、フランク人の祖は陥落したトロイアより逃れた人々であり、彼らの王はプリアモスやヘクトールの末裔である、との考えが流布していたが、メロヴィング家との血縁関係を主張することにより、ハプスブルク家もその血統に連なろうとしたのである。聖人暦草稿では、８月23日を記念日とするクローヴィスについての説明として「フランクの最初のキリスト教国王」、「ハプスブルク伯オットペルトゥスの祖父」と記入されているが[16)]、このメロヴィング家の血族とされたオットペルトゥスなる人物を、両家門の間のいわば連結環として位置づけてみせたことこそ、まさにメンネルによる起源説の要諦であった[17)]。これによりメロヴィング家の親族である諸聖人も、ハプスブルク家のそれとしてみなされえたのである。

メロヴィング家の王たちを祖先とする説は、いくつかの木版画作品の中にも表現され[18)]、当時におけるほとんど公認の系譜とされていたといえる。しかし、その一方で、ハプスブルク家の聖人たちの中に、カロリング家に連なる聖人が、メロヴィング家のそれ以上に数多く取り入れられていることも看過しえない。カロリング家とハプスブルク家の血縁関係については、メロヴィング家との関係ほどには明確な記述がなされていない。しかし、聖人暦草稿などにみられる、カロリング家の聖人たちの出自についての断片的な説明に基づいて彼らの系譜を再構成すると、その出発点にあたる人物が「オーストリア」の支配者とされていることが判明する。おそらくそれが、両家系の関係の原点とされたのだと考えられよう。

その人物は、カロリング家の伝説的な祖先アンスベルトとその子アルノルトであり、彼らについての記述は、アルノルトの兄弟とされる聖フェレオルス、アルノルトの息子とされるメッツ司教アルヌルフについての説明の中に含まれている。聖人暦草稿の、フェレオルスの記念日９月15日の項には「ロートリンゲンの公アンスベルトの息子」並びに「上下アウストラシアにおける公アンスベルトの息子」と記されている[19)]。同様に、アルヌルフの記念日７月18日の項には「ロートリンゲンの公アルノルトの息子」、「上下オーストリアの公アルノルトと聖オダの息子」と書かれている[20)]。これらの記述においては、ロートリンゲンとオーストリアが置換可能な語として扱われているといえようが[21)]、このような見方は、かつてロートリンゲンの地をも含んでいたフランクの分王国アウストラシアとオーストリア（アウストリア）の名称の類似

から導き出されたものであった[22]。聖人暦草稿、そして木版画解説文の中には、アウストラシアとオーストリアの関係についての具体的な説明は見出されないが、過去および現在の「オーストリア」の支配者として、カロリング家とハプスブルク家が結びつく、というイメージは十分に伝えられていよう[23]。

以上のごとく、支配地の名称を介してカロリング家とハプスブルク家は接続された。たとえ血縁を通じてつながりをたどることに困難があるとしても、カール大帝の血統の威光と聖性を可能な限り取り込むことは決して断念されていなかったといえる。また、カロリング家の出身地とされるアウストラシアは、マクシミリアンとマリー・ド・ブルゴーニュとの結婚によりハプスブルク家が相続することとなった地域と多く重なり合うがゆえに、マクシミリアンにとってこの説は歓迎すべきものであった。

ハプスブルク家の聖人とされる人々の中に、多数のイングランド王家出身者が含まれていることについては[24]、いまだ十分な説明がなされていない。メンネルが参照した史料の内容に影響された可能性もあろうが[25]、マクシミリアン自身が抱いていたイングランドへの関心が、聖人暦作成においても反映したとみなすこともできよう。

イングランド王家とハプスブルク家の系譜上の結びつきは、マクシミリアンにとっては第一に、彼の妻マリーの父、ブルゴーニュ公シャルルとマーガレット・オブ・ヨークの結婚によってもたらされたものであった[26]。そして、ブルゴーニュ家の系譜と同時に、その政策もハプスブルク家によって相続されたのであり、その要のひとつはフランスへの対抗策としてのイングランドとの同盟であった。とりわけ、聖人暦草稿が執筆されたと考えられている1513年頃は、マクシミリアンとイングランド王ヘンリ八世との同盟関係が深まっていた時期にあたり[27]、それがハプスブルク家の系譜研究と、これに基づく暦の作成に影響を及ぼした可能性は皆無ではないだろう。

おわりに

血縁・婚姻関係に基づいて、メロヴィング家やカロリング家など高貴な家系に発する多くの聖人をハプスブルク家の祖先として取り込み、それによって一門を聖性において称揚しようとすること、それがマクシミリアン時代に具体的な形をとって現れた例のひとつが、独自の聖人暦の作成という試みであった。それではこの暦は、誰が、いかにして用いるよう想定されていたのであろうか。

ここで史料として取り上げた聖人暦草稿、また木版画テキストには、その使途に関わる記述は見出されない。しかし、オーストリア国立図書館に所蔵されている、聖人暦のもうひとつの草稿には、「これは聖ゲオルク騎士団の暦である」との言及が含まれている[28]。聖ゲオルク騎士団は、マクシミリアンの父フリードリヒ三世により創設され、オーストリアのハプスブルク家世襲領の貴族を主要な構成員とした団体である[29]。したがって、聖なる家系としてのハプスブルク家のイメージは、まずはその支配を支える役割をする人々に向けて発信されるはずのものであったといえる[30]。

また、多数の聖人を家門の祖先に数え入れた系譜説は、マクシミリアン以後の世代にもある程度の影響を与えたであろう。対抗宗教改革時代以降、ハプスブルク家の人々は「敬虔なる君主」としての自己イメージを形成し、強調してきたが、そのための一連の行為の中には、特定

の聖人に対する崇敬の奨励も含まれる[31]。そのような行いの先駆としてマクシミリアン時代の試みを位置づける可能性について、今後検証がなされなければならないであろう。

さらに、マクシミリアンの理想的イメージ形成についての研究に際しては、ルネサンス期の人文主義の影響のもとに、古典古代に由来すると考えられたモチーフが取り入れられたことのみならず、本稿で指摘したごとく、キリスト教的な伝統に根ざした聖なる家門としてのイメージの創出が試みられたことにも、十分に目が向けられなければならないであろう。そして、その試みは、帝国の国王・皇帝の権威を神聖なるオーラのうちに表現せんとする、中世を通じて追求されてきた営みに連なるものでもある[32]。その具体的な諸相のさらなる解明、ならびに視覚化されたイメージについての図像学的見地からの考察は、しかし、今後の研究に委ねられるべき課題である。

註

1）後期中世以降に成立した、ハプスブルク家の起源に関する諸説については、Alphons Lhotsky, "Apis Colonna. Fabeln und Theorien über die Abkunft der Habsburger. Ein Exkurs zur Cronica Austrie des Thomas Ebendorfer" in: ders., *Aufsätze und Vorträge*, Bd. 2 (München 1971), S. 7–102（以後、"Apis Colonna"と略記する）.

2）ヤーコプ・メンネルの生涯と著作に関する主要な文献は、Alphons Lhotsky, "Dr. Jacob Mennel. Ein Vorarlberger im Kreise Kaiser Maximilians I.," in: ders., *Aufsätze und Vorträge*, Bd. 2 (München 1971), S. 289–311；ders., "Neue Studien über Leben und Werk Jacob Mennels," in: *ibid*., S. 312–322（以後、"Neue Studien"と略記する）；ders., *Quellenkunde zur mittelalterlichen Geschichte Österreichs* (Graz 1963), S. 450–456；Karl Heinz Burmeister / Gerard F. Schmidt, "Jakob Mennel (Manlius)," in: *Die Deutsche Literatur des Mittelalters. Verfasserlexikon*, Bd. 6 (2. Aufl. Berlin-New York 1987), Sp. 389–395；Karl Heinz Burmeister, "Seine Karriere begann auf dem Freiburger Reichstag. Der Jurist und Historiker Dr. Jakob Mennel (1460–1526)," in: Hans Schadek (Hrsg.), *Der Kaiser in seiner Stadt. Maximilian I. und der Reichstag zu Freiburg 1498* (Freiburg i. Br. 1998), S. 94–113.

3）Jakob Mennel, *Chronica Habspurgen[sis] nuper rigmatice edita* (Konstanz 1507).

4）"Fürstliche Chronik." 全5書からなる構成であるが、最後の第5書は第1部・第2部に分かれているため、巻数は6である。オーストリア国立図書館（ヴィーン）所蔵。

5）例えば *Allgemeine Deutsche Biographie (ADB)* におけるメンネルの項では、彼の著作のあるものは多くの点で不正確であり、また主著『君主の年代記』は無批判な歴史書だと評されている。Adalbert Horawitz, "Jakob Mennel," in: *ADB*, Bd. 21 (Leipzig 1885, 2. Aufl. Berlin 1970), S. 358–362. メンネル研究においてしばしば引用される代表的な批判的評価は、パウル・ヨアヒムゼンによるものである。Paul Joachimsen, *Geschichtsauffassung und Geschichtschreibung in Deutschland unter den Einflusse des Humanismus* (Leipzig-Berlin 1910), S. 200f.

6）Lhotsky, "Neue Studien," S. 321f. なお、マクシミリアン時代の系譜研究に関しては、これを主題とする視覚芸術作品を扱った、主として *Jahrbuch der Kunsthistorischen Sammlungen des Allerhöchsten Kaiserhauses*（以後 *Jb* と略記する）誌上における美術史研究を通じて学問的基礎が築かれていた。例えば、Simon Laschitzer, "Die Heiligen aus der >Sipp-, Mag- und Schwägerschaft< des Kaiser Maximilian I.," in: *Jb* 4 (1886), S. 70–288；5 (1887), S. 117–262（以後、"Die Heiligen"と略記する）；ders., "Die Genealogie des Kaisers Maximilian I.," in: *Jb* 7 (1888), S. 1–200.

7）Gerd Althoff, "Studien zur habsburgischen Merowingersage," in: *Mitteilungen des Instituts für Österreichische*

Geschichtsforschung 87(1979), S. 71–100；Dieter Mertens, "Geschichte und Dynastie - zu Methode und Ziel der 'Fürstlichen Chronik' Jakob Mennels," in: Kurt Andermann (Hrsg.), *Historiographie am Oberrhein im späten Mittelalter und in der frühen Neuzeit* (Sigmaringen 1988), S. 121–153.

8）ヴュルテンベルク州立図書館（シュトゥットガルト）所蔵のメンネルによる自筆草稿のテキスト全文は、以下の文献において公刊されている。Wolfgang Irtenkauf (Hrsg.), *Der "Habsburger Kalender" des Jakob Mennel (Urfassung). In Abbildung aus dem Autograph (Württembergische Landesbibliothek Stuttgart HB V43)* (Göppingen 1979).

9）*Ibid*., S. 5–20.

10）*Ibid*., S. 21–30.

11）*Ibid*., S. 3.『君主の年代記』初稿は同時代の学者たちの批判を受け、現存するのはオーストリア国立図書館（ヴィーン）に所蔵されている、第5書に相当する部分のみである。Eva Irblich (Hrsg.), *Thesaurus Austriacus. Europas Glanz im Spiegel der Buchkunst. Handschriften und Kunstleben von 800 bis 1600* (Wien 1996), S. 144.

12）"Heilige der 'Sipp-, Mag- und Schwägerschaft' Kaiser Maximilians I." ここで言う「親族」は、男系女系の双方を含むものである。この主題を描いた連作については、Laschitzer, "Die Heiligen," 4, S. 70–288；5, S. 117–262. 無彩色ないし水彩で彩色された3種類の素描連作が、オーストリア国立図書館（ヴィーン）に所蔵されている。Ibid.,5, S. 119–134；*Kunst um 1492. Hispania-Austria. Die Katholischen Könige, Maximilian I. und die Anfänge der Casa de Austria in Spanien* (Milano 1992)（以後、*Kunst um 1492* と略記する）, Nr. 132, S. 320ff.; Irblich (Hrsg.), *op.cit*., Nr. 32, S. 151ff. 細密画連作もオーストリア国立図書館（ヴィーン）所蔵である。Laschitzer, op.cit.,5, S. 134–148；*Kunst um 1492*, Nr. 130, S. 318f.

13）*Ibid*., Nr. 131, 133, 135, S. 319f., 322f. 木版画作者の同定については、Laschitzer, op.cit.,5, S. 159–171. なお、Laschitzer によってこの連作に関連するとされた聖人図木版画は、*Jb* 4号および5号において公刊されている。

14）この版には、図を伴う89聖人と図を伴わない35聖人、合計124聖人についての解説文が含まれており、そのテキストは次の文献に掲載されている。Laschitzer, op.cit.,5, S. 179–215.

14a) Jakob Mennel, *Seel- und Heiligenbuch Keiser Maximilians altfordern* (Freiburg i.B. 1522).

15）Ibid.,5, S. 178.

16）Irtenkauf (Hrsg.), *op.cit.*, S. 11.

17）アルトホフの研究によれば、メンネルはクローヴィスの孫テウデベルトをオドペルト（オットペルトゥス）に置き換え、さらにその同名の息子を「最初のハプスブルク伯」として系譜に挿入したようである。この説は同時代人からすでに批判を受け、その後若干の修正も加えられたが、ハプスブルク家の始祖をメロヴィング家の男系子孫とする構想自体は堅持された。Lhotsky, "Apis Colonna," S. 92–94；Althoff, op.cit., S. 80–90；Mertens, op. cit., S. 136–138.

18）ハンス・ブルクマイルによる『系譜書』、アルプレヒト・デューラーを含む画家たちによる『マクシミリアン一世の凱旋門』など。

19）Irtenkauf (Hrsg.), *op.cit*., S. 12. 木版画解説文では「上下アウストラシアにおける公アンスベルトの息子」とされている。Laschitzer, op.cit., 5, S. 180.

20）Irtenkauf (Hrsg.), *op.cit*., S. 10. 木版画解説文では「上下オーストリアの公アルノルトと聖オダの息子」とされている。Laschitzer, op.cit., 5, S. 183.

21）聖人暦草稿のカール大帝の記念日1月28日の項、また木版画解説文においても、「ロートリンゲンの公、小ピピンの息子」および「上下オーストリアにおける公、小ピピンの息子」と記されている。Irtenkauf (Hrsg.),

op.cit., S. 5. ; Laschitzer, op.cit., 5, S. 196.

22) Althoff, op.cit., S. 96-97 ; Mertens, op.cit., S140-141. 上アウストラシアすなわちロートリンゲンと上オーストリアとの、また下アウストラシアすなわちブラバントと下オーストリアとの同一視も、メンネルの著作において見出されることが指摘されている。メンネルの説によれば、ハプスブルク家の祖はアウストラシアから東方のドナウ流域に移動し、一族の故地の名を用いて新たな支配地をアウストリアと称したということになる。

23) さらに、アルヌルフに関する木版画解説文においては、彼の最初の埋葬地は当時「ハプスブルク」と呼ばれていた山であったと述べられている。Laschitzer, op.cit.,5, S. 183. メンネルは、"castellum Habendum"ないし"Habendum castrum"と伝えられる地名を「ハプスブルク」と翻訳し、現フランス東部ヴォージュ地方に存するアルヌルフゆかりのこの場所を、ハプスブルク家の発祥の地と名指したのである。なお、実際にハプスブルク一門の家名の起源とされる城は、現スイスのアールガウに建造されたものである。この説については、Althoff, op.cit., S. 98-100. ; Mertens, op.cit., S. 138-140.

24) イングランド王家出身とされる聖人たちのほか、「スコット人の王」の家系に属するとされる聖人たち、さらに「ブリタニア王の娘」聖ウルスラや伝説的な「ブリタニア王」ルーキウスまでもが含まれている。Irtenkauf (Hrsg.) *op.cit.,* S. 5-15 ; Laschitzer, op.cit., 5 , S. 208-212.

25) メンネルは、ハプスブルク家の聖人たちを構想するにあたって、イングランドに近いブラバントに由来する系譜や聖人伝を利用したことが明らかにされている。Althoff, op.cit., S. 93ff.

26) また、マクシミリアンの母、ポルトガル王女レオノールはランカスタ家のフィリッパの孫にあたる。

27) 1513年４月にマクシミリアンとヘンリ八世の間で同盟が結ばれ、同年８月には共同でネーデルラントにおける対フランス戦争を遂行している。また、同年10月にはカール（五世）とヘンリの妹メアリとの結婚契約が結ばれた。翌年には両者の同盟は崩れ、ヘンリとフランスの接近に伴い、カールとメアリの婚約は消滅、メアリはフランス王ルイ十二世と結婚するという政治状況の変化がみられたが、イングランド王家周辺に発する聖人たちを多く含むハプスブルク家の聖人たちの構成は維持された。1513／14年におけるマクシミリアンとイングランドなど西欧諸国との関係については、Hermann Wiesflecker, *Kaiser Maximilian I. Das Reich, Österreich und Europa an der Wende zur Neuzeit, Bd. 4* (München 1981), S114-153.

28) オーストリア国立図書館（ヴィーン）所蔵。手稿の後半部分にメンネルの作成した聖人暦が記されている。Laschitzer, op.cit., 5 (1887), S. 220f.

29) 聖ゲオルク騎士団に関しては、拙稿「マクシミリアン一世のプロパガンダと聖ゲオルギウス」、『大分県立芸術文化短期大学研究紀要』36（1998年）119-133頁。

30) 但し、この聖人暦に従った典礼の実施、またハプスブルク家周辺以外での受容については、現在のところ詳細は判明していない。

31) Anna Coreth, *Pietas Austriaca. Österreichische Frömmigkeit im Barock* (2. Aufl. Wien 1982), S. 73ff.

32) 後期中世における帝国首長の権威の表現に関しては、Ernst Schubert, *König und Reich. Studien zur spätmittelalterlichen deutschen Verfassunggeschichte* (Göttingen 1979), S. 35ff.